

食物アレルギー児のいる家庭の食生活に関する調査

○大土早紀子, 小野内初美, 渡辺香織, 有尾正子, 山本景子, 安藤京子
愛知文教女子短期大学 生活文化学科

(目的) 食物アレルギー児の食生活は原因食品を除去した食事(除去食)が基本に行われているが、幼児期、学童期の食生活は将来への食習慣の形成に影響がある。今回、食物アレルギー児のいる家庭の食生活について調査した。

(方法) 本学が毎年12月に開催する食物アレルギー対応のクリスマスパーティーの参加家族に対してアンケート調査を実施した。(平成15年から平成19年までの計5回)

(結果) アンケート回収率は100%で、子ども101名(うち食物アレルギー児は77名)について回答が得られた。①除去食は、「医師、栄養士などの指導のもと行っている」73%、「自己流」16%、「行っていない」5%であった。代替食は、「行っている」69%、「行っていない」14%、「方法がわからない」13%であった。②栄養補助食品は「食べさせている」が20%であった。③食事の内容は、「家族が同じもの」50%、「見た目は同じもの」29%、「まったく違うもの」5%であった。④間食について、与える時間は「決めている」が、おやつの内容は「親が決めている」が、内容は「せんべい類」が最も多かった。手作りする頻度は「月に1~2回」が最も多く、市販品を利用する傾向が見られた。⑤好き嫌いは、「ある」が63%で、毎日の食事で「努力や工夫をしている」が69%であった。⑥子どもの現在の食生活が将来の食習慣へ「影響を及ぼす」が91%であった。

(考察) 食物アレルギー児のいる家庭においては、その疾患の特異性から、間食については管理されている傾向が見られた。しかし、偏食の傾向が見られ、家庭ではアレルギー対応に加え、偏食対策を含めたより良い食習慣の獲得に取り組む姿勢が見られた。今後、食物アレルギー児を含めた食育の取り組みへの検討が望まれた。

第55回日本栄養改善学会学術総会にて発表